http://f-env.sakura.ne.jp

☆題字の樹木イラストは、環境の三大要素「水・緑・大気」をイメージ

府中かんきょう市民の会

NPO法人　府中かんきょう市民の会会報
2020年新年号 1月8日(水)発行　通巻75号
発行人　小西 信生（府中市四谷6-19-20）
TEL 042-405-8524
編集人　葛西 利武
（府中市市民活動センタープラッツ登録団体）

緑のナイト／樹木医
新井孝次朗氏の提言

貴重な西府崖線の「緑」を皆で守ろう！

ハケの合同調査が2019年7月18日(木)9:30～12:10に行われた。そこには、公園緑地課等(4人)、当会(7人)と当会が参加依頼した緑のナイトこと樹木医・新井孝次朗氏も加わった。（編集部）

浅間山との違い

ハケ樹木調査中の新井氏(前列右から2人目)

府中市内に残った貴重な崖線の植物は、浅間山に見られる植物とは大きく違っている。崖線は河川によって削り取られた護岸で、断層になって多数の水道(ミズミチ)が噴出している場所である。

森だけを見ていると浅間山は広いが、水分はその山に降り注いだ量と国分寺崖線上の伏流水が低地の山である浅間山で噴出している量で、崖線で湧き出す水分とは面積当たりの水分量は大きく違うものと思われる。

植物の種類も共通するものも多いが、明らかに量的に違うものもある。崖線の樹木で巨木になる樹種は西府崖線～府中本町～競馬場前～いききの道を経て調布に至る府中崖線に天高く揃って自生している樹木はケヤキである。これは、府中北部の国分寺崖線も世田谷の静嘉堂を経て等々力渓谷多摩川へと続く崖線にもケヤキが圧倒的な大きさで君臨している。

その「亜高木」にはシロダモ、アラカシ、アカガシ、シラカシ、ケンポナシ、イロハモミジ、コブシ、イヌザクラ、ウワミズザクラ、ミズキ等が目立つ。

「亜中高木」はイヌガヤ、ツバキ、コクサギ、ウコギが目立つが、古来大陸から移入され現在薪炭材として植栽のクヌギや暖冬で北上したスダジイ、タブノキ、クスノキ、シュロ等の常緑高木類中心が増え、崖線部の水分減少に伴いムクノキ、ムクノキ等のやや乾燥気味にも耐えうる樹木が崖線に侵入自生している。更に北米原産のニセアカシアやトウネズミモチ等の他に、明らかに植栽されたクロガネモチ、カツラ、マテバシイが見られるのが現状である。

※「亜高木」と「亜中高木」は、新井氏の分類方法による。

崖線の植生には多くの人的能力と近隣住民の理解が必須

2019年11月頃から、府中市によるハケ保全のため樹木伐採が始まり、2020年3月終了。風通しがよくなった「あずまや」付近

将来の崖線の植生を考えると難しいところであるが、人為的に植栽した植物→外国産侵入、移入植物→暖地性常緑高木→乾燥化により増え過ぎたムクノキ、エノキを中心に間引き伐採して整備することで低木や地被類は自ら生え易い場所に定着するものと思われる。

一度に高木から地被類まで整備しても環境が整わなければ衰弱し枯れてしまいかねない。狭く線として繋がっていない崖線の環境を整えるには多くの人的労力と時間と近隣住民の理解が必須である。

60樹木
41樹種

樹木ネームプレート総取替え

御嶽塚古墳上の53番ネムノキ取付け作業

2012年5月7日に第1回ネームプレート取付け作業を行ってからはや8年近い。当時は会員宅の庭先を借り、ホームセンターで購入したプラスチック板を小さく切り取り、その上部にシュロ縄を通す穴を2か所開けた手作りのネームプレートだった。

それを森林インストラクターの指導のもと、樹木名・科名・番号をその場で油性マジックで書込み、次々と取付けた。樹木は74、樹種は35であった。取付け場所は国立市側も含めたハケ上、ハケ下、さらには本宿町緑地にも及んだ。

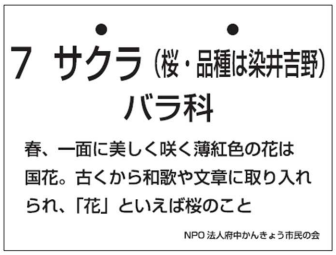
西府崖線を生態系を重視した自然樹林公園風にしたい

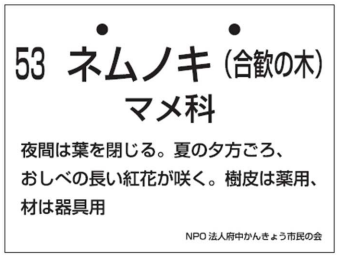
しかし昨今、プラスチック板の劣化が激しく、触ると煎餅が砕けるようになるものもあった。そのため、2018年12月1日と2019年11月5日に2回の事前調査を行い、2019年12月7日(土)に当会会員8名と樹木医・新井孝次朗氏をまじえて9:00～12:30に及ぶ作業を行った。天候は雨か雪が予想されるなかでの作業だったが、無事終了した。

今回はネームプレート製作の専門業者に依頼し、材質は「アルミ複合板出力シート貼り」で、一口メモ風の文字入れも行った。同種のものを減らしたため、取付け樹木が60に減り、逆に樹種は41に増えた。そのため、ハケに生育するほとんどの樹種に取付けたのではないだろうか。

ちなみに、今回の樹木分類体系は新井氏提案の1998年公表のAPG体系によった。（葛西利武）

一例として、「7 サクラ」と「53 ネムノキ」のネームプレート





第20回 バス見学会　杉並 練馬の『農業公園』を学ぶ

市民の会の20周年目の今年、20回目のバス見学会を開催した。第1回目の「三富新田」から第19回目の昨年の「三浦半島・小網代の森」と、その間私たちが考える環境分野もゴミ処理やエネルギー問題を始め、活火山と地震帯、生物多様性と広範囲に推移してきた。

今年は、府中市『農業公園』の施策が進む中、先進事例を学ぶために杉並区と練馬区の農業公園を見学した。

農の風景育成地区内にある「杉並区成田西ふれあい農業公園」

農地や屋敷林が急激に減少するなか、農に対する理解を深めるだけでなく、農の風景を未来に伝え残すことも目的とする。気軽に土とふれあい、農に親しむことができる約2,000㎡の公園がH28年4月に開園され4年目になる。

隣接するのは新築戸建住宅ばかりで、野菜の品種ごとのうね作り、周囲に生け垣を残すなど、農の風景を残したいと古くから農業をされてきた方からの寄付による思いが継承されている。大人向けの体験教室はもちろんのこと、小学3～6年生の栽培体験と収穫した野菜で家族を招待して芋煮会をするなど、次世代への農と食への関心も高めているとのこと。

江戸東京野菜「内藤トウガラシ」が赤く実っていた。バリアフリー菜園、災害時に利用できる「防災兼用農業用井戸と非常用電源」の設置もあり農地の多面的機能も重視されていた。　（浅田多津子）

杉並区成田西ふれあい農業公園

練馬区土支田農業公園

盛り上がった“大根”談義 練馬区立土支田（どしだ）農業公園

全体面積は約5,000㎡だが、隣接する街区公園をふくんだ面積であり、体験農園は約1,260㎡である。特徴は、個人区画、共同畑、見本園に分かれていることであり、基本的に体験農園（農業教室）を中心に運営されている。

当日は農業指導員吉田さんに説明していただいたが、まだ個人区画に植わっていた「おふくろ大根」と、既に共同畑で収穫され『たくあん漬け』用として干されている「練馬大根」で大いに盛り上がった。「おふくろ大根」はかなり太く成長する大根である。会員からは「三浦大根」との相似を指摘する声があがったが、「おふくろ大根」としての種子も販売されているというお話だった。

成田西ふれあい農業公園と土支田農業公園のコンセプトはかなり異なる。それは、農業面積が23区でも最も多い練馬区と、希少な存在となっている杉並区との違いでもある。これから農業公園を建設する府中市の市民として貴重なバス見学会であった。　（伊藤久雄）

17回 連続参加　「市民協働まつり」に出展

2019年11月23日(土)～24日(日)、第5回府中市民協働まつりに参加しました。このイベントは市民協働まつりとしては第5回ですが、2003年から始まった前身の府中NPO・ボランティアまつりで12回開催し、その後市民協働まつりに名称を変更し、会場も第3回目より、グリーンプラザからル・シーニュ5～6階の市民活動センターに移転して開催しているものです。当会は、NPO・ボランティアまつりに第1回から連続参加しています。

当会の今年の参加内容

今年の当会の参加は、会の活動内容のパネル11枚を掲出し、西府崖線活動や、田んぼの学校の開催など、活動のPRを行ないました。自然やリサイクルに関連した、以下の7種の楽しいものづくりとその配布も行ないました。

- ペットボトルを使ったプラトンボづくり
- いろがみで作るアオムシ
- 野草の数珠玉でつくるブレスレット
- シュロでつくるバッタ
- チョウ飛行機（熱帯のアルソミトラの木の種を模して）
- ひらひらモンシロチョウ（オスのチョウがメスと思いこんでよってくる）
- ハリガネでつくる水に浮くアメンボ

また、今年スタンプラリーに替えて行なった「謎解きミステリーツアー　初級ハクビシンを捜せ」のなぞなぞの答えを、当会の活動の一つである「大気汚染調査の二酸化窒素」を捜す場所にもなりました。

数珠玉のブレスレット作りに挑戦中

5階特設ステージのフラメンコダンス

盛況だったイベント

市民協働まつり全体では、出展した団体数130（企業、市役所、活動センターに未登録団体などを含む）で開催し、入場人数は2日間で18,000人強でした。

天候は初日は雨、2日目は曇りのち晴れでした。2日目は府中まちなかフェスタもけやき並木通りで開催されており、盛況でした。

当会のブースも座ってものづくりに参加していただいた市民だけでも各日約100人、2日で約200人でした。その他に、ものづくりに参加した市民はお子さんが多かったことから、当然参加者と同じ位の保護者もいらっしゃいました。

謎解きミステリーツアーのチェックポイントとしての来場者や、本来の当会の活動パネルを見ていただいた来場者もいらっしゃいましたので、全部の当会ブースへの来場人数は、200人の何倍かにはなっていたと想定されます。

（小西信生）

五小 野草班 環境学習　春と秋の移り変わり体感

春に引き続き、秋の移り変わりを体感するため、10月4日㈮午後2時～2時30分頃まで校庭横の崖線に出かけた。

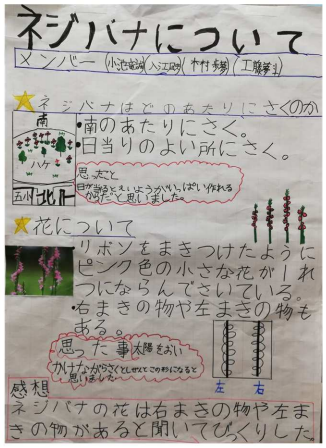
野草を観察する児童

秋の七草のハギ、クズ、ススキのほか、真っ赤なヒガンバナ、オシロイバナの花と実、背丈ほど伸びたアメリカセンダングサの実や、ノブドウや垣根を覆うヤブガラシのつる、足元に咲くイタドリやニラの白い花、ヨモギやドクダミの葉などを見て、触って、においを嗅ぐなど秋の野草を目にしながら約30m間を歩く。実をつぶしてみたり、洋服などについて拡散される種を触ったり、ススキの穂に触れては「ふあふあ～！」と声が上がる。図鑑上だけでなく、実際の植物を身近に感じながら疑問を掘り下げていこうとする児童たちは輝いていた。

野外活動後、7項目の総合的座学を行う

授業の前には野草班担当者らで必ず現場を見ることにしている。事前に児童から挙げられた課題をもとに、実際に咲いている野草からさらに関心を持ってもらいたい内容を吟味し、今回は崖線に咲く秋の七草、有毒植物、有益な野草などを選択し、観察を深めた。

野外から帰り、教室では、グループごとに調べたい内容①春の花と秋の花とその違い②春に咲くネジバナについて③秋に咲く花④ノブドウとその育ち方⑤食べられる野草⑥お茶にできる野草⑦絶滅危惧種について総合的な座学を行なった。



日本には四季があること、春には柔らかい新芽や草が生え秋は冬への準備で実がなり、葉は栄養を蓄え固くなっていることなど、野草全般について話しをした。質問では、「なぜ、ネジバナはねじれているの？」が出される。

☆みんなで協力したい。だから、かってに野草をぬいたり、ふまないようにしたい。ぜつめつしないように、そだてる地いきのほごや、そのためのぼ金などができて、世界のぜつめつきぐしゅが少なくなってほしいです。

その後8時間の授業を経て、10月12日㈯午前、身近な自然学習のポスターセッションが行われ児童たちの発表を見る。

「絶滅危惧種」では、最下段の「考えた事」に目が留まる(㊧写真下の赤枠)。左にその原文を紹介する。なお、今回は昆虫・樹木・野鳥班は教室での学習となった。　(浅田多津子)

四谷小／環境学習　「多摩川探検」を実施

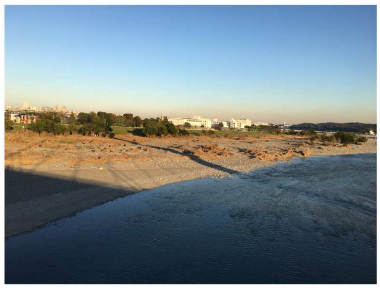
9月30日㈪の1～2時間目3年生の総合学習の時間に2019年度3回目の環境学習を「多摩川探検」の名前で行ないました。天候は晴で微風、気温は25℃前後、フィールドワークにはいい自然条件でした。

校庭での多摩川探検の説明／㊧㊦写真は岸辺での水生動物探し

参加児童は3年生全員の3クラス113人、当会は会員11人の他、東京農工大研究員や近隣住民、研修として参加した市職員など6人、保護者9人、校長と3年生担任の3人の教員4人の大人30人、合計143人で行ないました。

今回の学習は事前に用意したテーマ別に、樹木・野草・虫・野鳥・魚・石の6つから児童が選んだグループに分かれて、多摩川河川敷の中で行ないました。多摩川は小学校の隣にあるものの、河川敷には普段は児童は立ち入ってはいけない場所です。

河川敷には多くの樹木や草花が生えています。本格的な調査では200種類以上が観察されており、その時期に応じて花を咲かせ、実をならせ、虫が住み、魚も生き、鳥も生活している河川敷です。上流から流れてきた河原の石も今回の学習対象にしました。それぞれに自然観察としては奥の深いテーマですが、「自然を知る糸口になる学習」になり、「子どものたのしい記憶に残る授業」になったのではないかと思います。


台風19号後の四谷橋から見た多摩川と四谷小学校㊤通過前㊦通過後

四谷小学校では3学期も「多摩川探検」をテーマに学習を行なう予定で、当初は冬の渡り鳥を中心に観察の計画です。

冬は草や虫を観察することは難しいためですが、10月12日の台風19号により府中市の市街地は洪水を免れたものの、河川敷の中は8～9割の樹木は水で押し流され、河川敷の姿は大きく変化しました(写真㊤)。

樹木は1974年の狛江の堤防決壊後に40年ほど前に行われた堤防の改修工事後に自然に生えてきたものでしたが、9月の自然観察がほぼ最後の観察になってしまいました。自然観察は大きな自然の変化の中で行なうしかなく、なかなか計画どおりにはいかないものです。(小西信生)

第6回歴史・自然遺産めぐり　西府ハケから国立市へ

開催日時は11月3日㈰の文化の日、時間は9:00～11:20。参加者25人。先着20人と広報ふちゅうで告知したが予想を超えての参加者となった。ガイドは当会理事長の小西信生。

コースはJR南武線 西府駅→御嶽塚古墳→西府町湧水→国立富士見台幼稚園観察用水田→国立「ハケ・用水のある農の風景」→谷保天満宮→城山さとのいえ→古民家（旧柳澤家住宅）→立川断層崖である。JR西府駅を9:10に出発し、今回はお隣の国立市に足を延ばす。

西府文化センター横の御嶽塚古墳は直径約25mの円墳。付近では7世紀中期以前に築造された古墳が13基確認され円筒埴輪や圭頭大刀(ケイトウノタチ)、耳飾などが出土している。

西府崖線の東京の名湧水57選、西府町湧水に向かう。西府町湧水は一時水量が少なくなり、枯渇が心配されたがこのところの大雨で水量が増えた。多分、土中の水道（ミズミチ）が変化したのではないだろうか（写真㊦㊧）。

水と緑のコリドー（回廊）、農のある風景　そぞろ歩き

西府町湧水

幼稚園観察用水田の案山子

西府町湧水下の府中用水を西（右）側に行くと大山道に出る。大山道を渡り、視界の右側に展開するハケの緑が目に優しい。その先しばらく国立市の「ハケ・用水のある農の風景」を楽しむ。国立富士見台幼稚園観察用水田には園児用の可愛い案山子が立てかけてあった（写真左下㊨）。水路、田んぼの側を歩くと、ハサかけされた稲穂の匂いが微かにする。

谷保天満宮

立川断層崖/右から2人目小西

間もなく谷保天満宮に着き、ここで休憩とした。谷保天満宮は菅原道真の子・道武が父をいたんで祀ったのを期限とする日本最古の天満宮とされる。日曜・祭日しか入館できない寶物館では、本宿で出土した「延文の板碑」を見る。弁天池ではニシキゴイが悠然と游ぎ、カメはのんびり甲羅干し。その横には東京の名湧水57選の「常盤の清水」がある（写真㊤㊧）。

古民家（旧柳澤家住宅）に向かう。古民家は江戸時代から使われていた農家を国立市が移築し、復元したものだ。そこには昔懐かしい縁側と横には湯殿（ふろ場）があった。住居内にはカマド、ウマヤなどがあり、人馬一体の生活も偲ばれた。

最後は立川断層崖。ガイド小西が断層崖の地図を基に、その傾斜地で説明する（写真㊤㊨）。ここで、終了解散。大変健康的で、文化の日にふさわしい一日だった。（葛西利武）

秋の清掃活動、巣箱清掃／昆虫の生態系調査

秋の清掃活動が10月26日㈯ に32人の参加を得て実施されました。ハケ上、ハケ下の3班に分かれ、時間は9:30～11:30です。同時に、巣箱6個も冬鳥営巣に備えての清掃を行い、6個中4個に営巣が認められました（㊦㊧写真／巣箱から取り出した「巣」）。収集ゴミの内訳は、燃やすゴミ12袋、燃やさないゴミ2袋、ビニール傘6本等です。

清掃終了後には、約1時間かけて昆虫の生態系調査が行われ、8類17種の昆虫が確認されました。このところ、毎年雨にたたられ心配していましたが当日は久しぶりの好天となり、嬉しい誤算となりました。

当会の清掃活動は春・秋の2回実施され、はや8年目となりました。「継続は力なり」という格言がありますが、ゴミが年々減っていることが実感されます。

入所6年目府中市職員の研修2人受入れ

今年も昨年に引き続き、入所6年目の府中市職員の研修2人を受入れ、市民協働推進課から2人の参加もあり、計4人の市職員の参加がありました。

職員は清掃終了後「昆虫の生態系調査」にも自主参加され、感想としては「一緒にごみ拾いに参加できてよかった」「この場所は園児たちとよく歩く散歩コース、昆虫の生態系も知ることができてよかった」などの言葉がありました。ちなみに、市職員の入所6年目の研修としては、府中市立第五小学校、四谷小学校の環境教育にも各2人の参加があり、計6人の参加がありました。（葛西利武）

㊤写真／自己紹介中の研修職員
㊧写真／生態系調査中の研修職員

五小児童からお礼の手紙

府中市立第五小学校3年生全員から当会の環境学習に対するお礼の手紙です。全部で125通ありますが、紙面の都合で1通だけ紹介します。3ページをご参照ください。

かんきょう市民の会のみなさまへ

今日の発表会に来てくださってありがとうございました

私は発表をする時にとてもきんちょうしたけれどポスターを見たらおちつきました。

かんきょう市民の会のかたが来て発表が終わった後、まだ調べていない事を話してくださって、「へぇ。」とすごく思いました。これからもお体に気をつけてください。（原文のまま）　※㊤お礼の手紙の写真

作物収穫に感謝
翌年の豊作祈願

援農ボランティア 収穫祭

本年度の収穫祭は好天に恵まれ、農園主と会員計16名参加で盛大に終えることができました。年1度の収穫祭は農園主宅を持ち回り開催で、農園主と援農活動者が一堂に会し、本年の農産物の収穫を農園主とともに祝い、相互の親睦を深め、更なる活動を持続・発展させることを目的としています。

現在、援農ボランティアは小林農園と市村農園で6班に分かれて各々月1～3回の活動を行っており、援農活動者としての登録者は26名です。

進行は竹内相談役の挨拶と乾杯で歓談となり、「一人ひと言」では自己紹介、PR、提案等を報告して活発な意見の応答もあり、コミュニケーションが十分に図れました。

援農活動者の「絆」が感じられた

柿本副理事長の縁に関わる話しの挨拶と、当会で長く援農ボランティア活動に携われてきた竹田さんへの慰労の

会場全体風景／市村農園庭先

援農ボランティア収穫祭要領

1)開催日:12月1日(日) 12:00～14:00
2)場　所:市村農園庭先(押立町)
3)参加者:市村農園主、小林農園主、
　援農ボランティア活動者(10名)＋支援者(4名)
4)収穫祭内容:バーベキュー(焼肉、野菜、焼きそば)
　豚汁、さつま芋、ビール、お酒他
5)参加費:1,000円／人

市村農園主(前列左から2人目)
小林農園主(前列左から3人目)
終了後の記念撮影

お礼(拍手)後に終了宣言で閉会しました。テーブル設営や後片付けは全員参加でスムーズに行われ援農活動者の絆を感じ、ゴミは分別して持ち帰りました。

感想としては、カルビ肉の焼肉・具たくさんの豚汁・野菜一杯の焼きそばを美味しく頂けたことと農園主と和やかに会話ができたので、当会からの感謝の意が伝わり好印象を受けたことは収穫祭としては成功でしたが、援農活動者の参加者(10名)が少ないのは反省点となりました。

援農ボランティアは身近な農業体験と交流の場として、有意義な活動であると改めて認識しました。(牧原文男)

東京農林水産フェアの見学記

竹田 勇
渡部敏郎

東京農林水産フェア(令和元年10月26日㈯／東京都農林水産振興財団 立川庁舎)で、東京都農林総合研究センター(以後、都農総研)が開発したばかりの「東京型統合環境制御生産システム」や農林水産物の多岐にわたる研究や成果を見学した(㊨㊤はフェアのチラシ)。

フェアの内容は①試験研究の紹介・展示②圃場見学ツアー③野菜の種まき、植え付けと収穫体験④東京産の新鮮野菜や花、農家の加工品の展示販売⑤多摩産材木工品の販売と丸太伐体験⑥ハーブの寄せ植え体験等。

これらの農水産物、木工加工品、畜産物、食品加工まで幅広い分野を担当する東京都唯一の試験研究機関として多様な技術開発に取り組んでいる。

都内の農地でも収益を確保する都市農業向けシステム

研究所では、農家の収益性を高めて、農業の担い手減少を食い止め、大消費地という立地を生かして都内産野菜の普及を進める手段として「東京型統合環境制御生産システム」を開発した、その現場の案内・説明を受けた。このシステムについては、次号の春号に詳報する。以上、大きく拡大した都農総研の活動を注視すべきと思う。

望年会 今年も盛上ったオークション！

かんきょう市民の会恒例の望年会。今年は初めてル・シーニュの会議室で開催した。“年忘れ”ではなく“来年を望む”ための会に今年は22人の会員、賛助会員が参加。普段あまり交流のない会員・賛助会員同士の話が弾んだ。

毎年盛り上がるオークション。前川会員の威勢のいい掛け声で会員の持ちよった品々はすべて購入された。例年より相当に多い売り上げとなった。市民の会の活動は多岐にわたる。一堂に会する機会として貴重な時間を過ごすことができた。㊦写真／望年会2景　(伊藤久雄)

当会の事務局員、編集委員、公園清掃責任者等として大活躍されている髙橋和夫(タカハシ ヨシオ)氏が「府中元気一番賞」を受賞されました。日時は2019年9月27日㈮、会場は市役所北庁舎3階第2会議室。髙橋氏に感想を聞きましたところ、当会での活動が「元気の源」になっているとの事でした。㊨写真髙橋氏

＜ボランティア・社会貢献活動部門＞

緑と水のネットワーク「西府崖線」の保全活動のさらなる推進

Next goal for the conservation activities of Nishifu Cliffs as key setting of Green and Water Network System

竹内　章
NPO法人府中かんきょう市民の会 相談役

1. はじめに

NPO法人府中かんきょう市民の会（以下、当会）は、1999年４月に発足した府中の環境やまちづくりを考える市民のボランティア団体です。

2019年４月で会発足20周年を迎えました。当会が「西府崖線」の保全活動を開始したきっかけは、2003年３月にJR南武線の新駅開設に伴い、西府崖線を切り崩して道路を新設する計画があり、それに反対する意見書を府中市長宛提出した事によるものです。

以後、2004年10月に、当会の緑地保全活動事業の一環として「西府崖線を守る会」を発足して、保全活動を開始しました。

「西府崖線」とは、多摩川が長い年月を掛けて浸食して出来た斜面緑地で、府中市を東西約６kmに渡ってできた「府中崖線」の西端部をいいます。高さは約８～10mで自然豊かな樹林地を保ち多種多様な生態系を維持しています（写真１）。

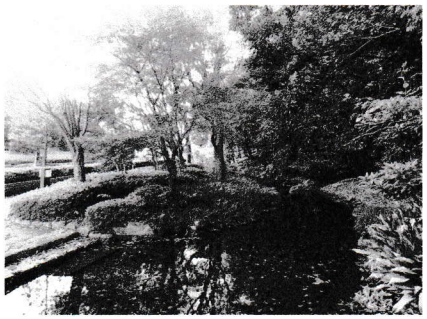


写真1　西府崖線

2. 西府崖線の具体的な保全活動

１）西府町湧水の保全

2004年２月に、西府崖線の中にある「西府町湧水」が、「東京の名湧水57選」に選定されたため、2006年４月から毎月湧水量の測定と年２回の水質調査を府中市（以下、市）の受託事業として開始しました。その結果、湧水量は前月の降水量と比例している事が判明しました。湧水量は周辺の宅地開発に伴い、雨水の地下浸透が減少し、年間の湧水量が年々減少している事も判明しました。

水質調査結果は、PH、鉄分、CODなど７項目について調査しており、いずれも基準値を大幅に下回っている事も分かりました（写真２）。

２）毎年春と秋の一斉清掃

2011年から、５月と10月に西府崖線一帯の一斉清掃を行っています。この活動は、地域の住民や企業、団体にも呼びかけ、地域ぐるみで行っています。当初は粗大ごみなども多くありましたが、年々ゴミの量も減少してきています。

写真2　西府町湧水

また、崖線下には、市民の憩いの場所として「カッパ池（カッパの銅像あり）」がありますが、落葉が多く汚れ易いので、湧水量を測定した後に毎月池周辺の清掃も行っています。

更に、市では2015年４月から、「府中市インフラ管理ボランティア制度（通称：府中まちなかきらら）」が開始され、道路や公園、緑地などの清掃を市民や団体がボランティアで行うことになりました。

早速、当会もこの制度に加入し、「西府崖線」一帯を、この制度の適用を受け、現在も清掃活動を継続しています（写真３）。

３）「わき水まつり」の開催

2011年から毎年６月～７月に「わき水まつり」と称して、講演会と野外活動を開催しています。この活動は、市民に崖線の素晴らしさを認識し身近な緑地を大切に保存して貰うためのもの

写真3　崖線の清掃活動

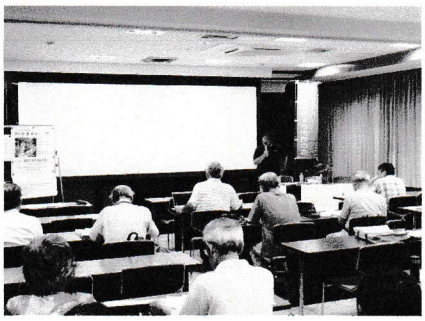


写真4　講演会

写真5　野外活動

です。

「講演会」は市民を対象に、樹木医や学芸員、市の公園管理の職員など緑地保全の専門家を講師に迎え、開催しています。「野外活動」では、専門家を招き、崖線に生息している昆虫や草花、野鳥の観察会や、近くの用水路で魚を捕獲しての魚類調査も行っています。

これらの調査結果を基に「西府崖線と用水付近の生き物」や「ハケに咲く四季折々の花」としてカラー図版を作成して、イベントなどで市民に配布しています。

これらの調査結果は、年間まとめてデータ化し「西府崖線の生態系調査」として市の受託事業となり、正式な調査結果として、市が毎年発行している「府中の環境」に掲載されています。

また、東京都の絶滅危惧種（Ⅱ類）に指定されている「キツネノカミソリ」の群生地を保護しています。キツネノカミソリはヒガンバナ科の多年草で、毎年７月下旬から８月上旬にキツネ色の花を咲かせます。市民に呼びかけて鑑賞会も開催しています（写真４、５）。

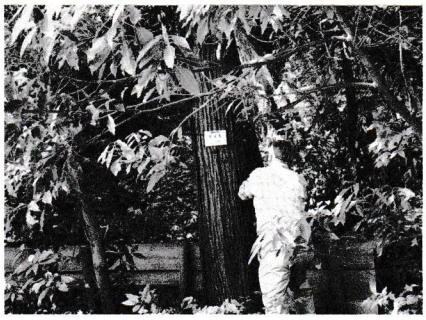


写真6　樹木の名札付け

４）西府崖線の樹木管理

2011年から西府崖線の主な樹木を対象に専門家と共に調査を行い、樹木に名札を取り付けています。名札には番号、樹木名、所属科名を記載して、近くを散策する市民に自然や樹木に関心を持って貰うよう、実施しています。

また、取り付けた名札がどこにあるか分かるように「樹木マップ」を作成して、イベントなどで市民に配布しています。これまでに取り付けた名札は約35種類、74本となりました。更に、崖線全体に繋殖している棕櫚（シュロ）の木も、市に依頼して50本ほど伐採しました（写真６）。

５）近くの小学校で環境学習会開催

2018年から、西府崖線の近くの小学校で３年生を対象に、崖線に生息している昆虫や草花、樹木などをテーマに学習会を開催しています。学習会は２部構成で、１部では、崖線とは何か、崖線に生息する生き物にはどのようなものが生息しているかなど一般的な知識を勉強し、２部では実際に崖線を回り観察会を行っています。この学習会は春と秋に実施し、季節の移り変わりによって生息する生き物や草花に、どの様な変化が生じるかなど学んでいます（写真７）。

６）自然豊かな崖線を巡る歴史遺産ツアーの開催

崖線沿いには、昔から古墳や神社仏閣が多数点在し、史跡の宝庫です。当会では、2014年から毎年11月に市民に呼び掛けて「歴史遺産めぐり」を開催し、毎回20名程度の市民が参加しています。

写真7　近隣の地域包括支援センターでツバメの巣とヒナを観察

3. おわりに

崖線を保全する取組みとして、東京都は2012年３月に「崖線の緑を保全するためのガイドライン」を策定しています。これは、崖線の保全、保護や活用を図るために関係する区市町村が連携した取組みを進めるための手法、手順を示したものです。

また、2010年３月に「多摩川由来の崖線の緑を保全する協議会」を設置し、組織及び運営に関し、協議しています。

一方、市では、「府中市緑の基本計画2009」を策定し、市民や事業者の協力のもと、適切な維持管理を実施することになっています。

当会が西府崖線の保全活動を開始するきっかけとなった道路計画は、諸事情により中止されましたが、この事が崖線の保全活動に繋がった事は間違いありません。これからも市民とともに保全活動を継続して次世代にバトンタッチしていきたいと思っています。

☆第54回東京都公園協会賞 優秀賞

6～7ページの記事は、東京都公園協会専門誌「都市公園227号／令和元年12月20日発行」に掲載された竹内章相談役の記事を当会の会報・新年号に転載した。　（編修部）

米づくり体験 2019

田んぼの学校　第3回「脱穀・籾摺り・修了式」

10月6日（日）東京農工大学本町農場の水田で、第3回田んぼの学校を開催しました。朝9時から昼頃まで、前回ハサかけした稲を脱穀し、籾を摺って、玄米にする過程を機械と手作業で体験するほか、残った稲ワラで簡単なわら細工もします。当日は曇りから雨が一時ぱらついてハウス内に作業場の一部を慌てて移すひとコマもあり、本降りこそ免れたものの、秋の天気の気まぐれに踊らされました。

雨のぱらつく曇天。
本降りにならず天に感謝！

「お米、大事に食べなくちゃ」のつぶやき…

機械での脱穀は、電動と足踏みの2種。勢いよく回る歯に乾いた稲穂を慎重に当てて、籾を落としていきます。足踏みはタイミングがずれると逆回転してしまうので、四苦八苦する姿も見られました。

籾摺りは、殻をこすり取って、玄米にする工程です。1回では籾殻を取りきれないので、何度も機械に通して、玄米だけになったところで袋詰めします。熱心に取り組む生徒の力もあって、この日は30kgの玄米が仕上がりました。

手作業の体験は、自宅で育ててきたバケツ稲を無駄にしないための学びでもあります。お箸や指で籾をこき取って、すり鉢でよくこすって（お米が砕けず、適度に摩擦があるゴムボールが最適）、籾殻を優しく吹き飛ばして完成です。バケツ稲では2000粒くらい実った生徒もありましたが、それでちょうどお茶碗1杯なんですよ、と説明があると「お米、大事に食べなくちゃ」というつぶやきがあちこちで聞かれました。

一升瓶に玄米をいれて棒で突く精米にもチャレンジ。代わる代わる作業しますが一向に様子が変わりません。何時間かやって五分搗きかな、と昔を知る農家さん。

わら細工講座、満面の笑み✌

稲は捨てるところがない、ということで簡単なわら細工講座も。「カタツムリに見えてきた！」「わらはかたかったけれど、楽しかった」。仕上がると皆、満面の笑みに。

みんなで育てたお米をもらう

全3回の講座は今年育てたお米と修了証や優秀賞の授与で終了です。

今回は生徒23人、保護者など32人、農工大耕地の会の学生7人、わら工芸の講師3名、市職員3人、当会スタッフ17人、計85人が参加。今年は、生徒42名に対し、田植え参加者は36名、稲刈りは26名と欠席が増えました。みんなで1枚の田んぼを世話するので、何かで休んでも、次の回は問題なく参加できます。来年は出席率が改善しますように！

（荒川　紀子）

耕地の会の学生さん、
いつもありがとうございます！